

花 か ゴ

女性部学校大好評でした！

感想＝1

上尾単組



シオリヌさんの講演は、これまでの私の性教育のとらえ方に、新たな視点を与えてくれました。それは、「性教育の世界基準」というお話の中の「包括的性教育」という概念です。日本で性教育というと、小学校高学年から始まる第二性徴についての学習や、妊娠・出産に関する学習というイメージが強いと思います。しかし、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス(ユネスコ編)」によれば、性教育は本来、人権や文化、健康と幸福のためのスキルなど多岐にわたる内容を含んでおり、5歳から始めるべきものなのです。幼いころから、ジェンダーの理解や互いの価値観を認めるなど、身近な家族や友人との良好な関係を築く力を身に付けなければ、将来、パートナーや自分を大切にしたい性的行動はとれない、という考え方です。小学校低学年を担当することの多い私でも、性教育は学校教育全体を通じてできるし、すべきことはたくさんある、と改めて気づかされ、実践意欲のわく講演でした。

感想＝2

児玉単組

去年の女性部学校の参加を最後に電車に乗っていない。感染は避けたい、でもみんなと学びたい。そういったジレンマの中、今年女性部学校はzoom参加も可、ということで喜び勇んで申し込んだ。お誘いしたら、元同僚の養護教諭も「中学校では3学期に性教育が予定されているので、ぜひ！」と参加してくれた。毎日時間と闘っている女性はオンラインのほうが参加しやすいのかもしれない。

誰にとっても不安だった2020年、10代からの性に関する相談件数は前年の1.8倍とのこと。大人同様、子ども達もスマホ・ネット時間が増えている。「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」(明石書店)には「5歳から包括的性教育を」と書かれているのだそう。アダルトコンテンツにふれる前にリタラシー(読解力)を、というのなら、やはり小学校低学年から性教育を行うべき

だ。「教えられていないのに、“自己責任”をとられる」今の日本の若者は新自由主義の犠牲者だ。

「どんどん私のYou Tube動画を教室で使ってください！」というシオリヌさんは、学習指導要領改訂(中学保健の性教育歯止め規定の撤廃)、教員研修、教員の負担軽減などの陳情活動もして下さっているとのこと。You Tuberなんて別次元の存在と思うなかれ、明るく軽いテンポで、若者に大切なことを語りかけるシオリヌさんの姿に、私達教員は学ぶところが多い。

「男性主流の日本社会での効果的な訴え方は？」と質問してみた。「相手にとって受け止めやすい言葉を使うんです。“性教育”なんて言っちゃダメ、“プレコンセプションケア(妊娠前のケア)”って言い換えるんです。」とのシオリヌさんの回答。なるほど！

「断れる＝相手への信頼の証拠」という図式は、男女を問わずすべての人間関係に共通している。

「性＝生きること」なら、性教育は人権教育の根幹だ。人権教育の範囲で学校に性教育のための外部講師を呼ぶ予算も捻出できるのではないかな。

今の子どもたちにとってYou Tubeを代表とするインターネットは「いつでも、どこでも、だれにでも」必要な情報(時に正しくないことも多いが)を手軽に与えてくれる「師」なのだろう。私達は教育の本質を胸に学び続けて、ネットよりもタブレット機器よりも信頼される、「生身の教師」でありたい。

初めての「ハイブリッド女性部学校」のスムーズな進行、会場の皆さまには大変お世話になりました。また、いつものようにお顔を合わせて一緒に笑ったり怒ったり(?)できる日を楽しみにしています。

